



Title	hint+gehenの出現率と独訳聖書のタイプ分けの相関関係：直訳型聖書/意訳型聖書
Author(s)	渡辺, 伸治
Citation	人文学林. 2024, 1, p. 205-225
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95140
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

hin+gehen の出現率と独訳聖書のタイプ分けの相関関係

—直訳型聖書/意訳型聖書—

渡辺伸治

Zur Korrelation zwischen der Häufigkeitsrate von *hin+gehen* und der Klassifizierung deutscher Bibeln: philologische und kommunikative Übersetzungen

WATANABE Shinji

Der Verfasser versucht in diesem Aufsatz, anhand von *hin+gehen* 11 deutsche Bibeln (10 Bibeln im Gegenwartsdeutsch und eine Bibel im Frühneuhochdeutschen) zu klassifizieren. Die Bibeln werden zuerst nach Übersetzungstyp in philologische Bibeln (7 Bibeln) und kommunikative Bibeln (4 Bibeln) eingeteilt. Diese Klassifizierung wird dann mit der Häufigkeit von *hin+gehen* verglichen, und der Verfasser stellt fest, dass die Häufigkeit mit der Unterscheidung von philologischen und kommunikativen Übersetzungen korreliert, und zwar dahingehend, dass *hin+gehen* bei den philologischen Übersetzungen häufiger vorkommt als bei den kommunikativen Übersetzungen. Der Verfasser stellt ferner fest, dass die Übereinstimmungsrate, mit der *hin+gehen* an der gleichen Stelle gebraucht wird, bei den philologischen Bibeln höher ist als bei den kommunikativen.

キーワード：hingehen, 独訳聖書, 翻訳タイプ

1. はじめに

最初に本稿の背景, 目的, 結論, 先行研究について簡単に述べる。筆者は, 渡辺(2022a)において, 現代語訳ルター聖書2017(以下L2017)と現代語訳チューリヒ聖書2007¹⁾(以下ZB)のマタイによる福音書におけるgehen/kommen(以下g/k)を考察したが, 考察の過程で单一不変化詞hinと共に起したgの出現数(率)はL2017とZBでは著しく異なっていることに気付いた。すなわち, L2017はg総数173に対し hin+gは43例あり, ZBはg総数148に対し hin+gは11例の

1) L2017, ZBともに以下で見るERF Bibelserverのオンライン聖書を使用した。

みであるという違いである。g総数に対するhin+gの出現数を%にすれば、24.2%対7.4%になり、L2017ではZBの約三倍の出現率になる。それでは、この違いはL2017とZBの訳者の単なるスタイルの違いに過ぎないのであろうか、あるいはこの違いと相関する何らかの別の違いがあるのであろうか、本稿はこの疑問を出発点とした論考であり、目的はこれに答えを与えることである。そして、本稿の主な結論は、本稿で対象とする11種類の独訳聖書におけるhin+gの出現率は、直訳型/意訳型という翻訳タイプの分類と相関関係があり、出現率は直訳型では高く、意訳型では低いというものである。hin+gの出現率は、直訳型/意訳型の分類の形式的指標として機能していることになる。

なお、直訳型/意訳型の分類と相関関係にあるものはhin+gの出現率だけではなく、逆にhin+gの出現率と相関関係にあるものも直訳型/意訳型の分類だけではないが、本稿ではhin+gの出現率と直訳型/意訳型の相関関係のみを考察する。ただし、本稿では、L2017と1545年版ルター聖書を比較対照することで、hin+gの出現率と、聖書が出版された時代との相関関係も簡単に見ることにする²⁾。さらに、聖書間におけるhin+gの一一致率を挙げ、簡単にではあるがこれも直訳型/意訳型と相関関係にあることを述べる。

本研究に関する先行研究としては、計量文体学からの論考であるCovington et al. (2015)、高橋 (2017, 2018) がある³⁾。Covington et al. (2015) は、10種類の英訳聖書のマルコによる福音書を対象に、「Mean Sentence Length」「Propositional Idea Density」「Vocabulary Diversity」を変数としてクラスター分析をおこなった結果、対象とした英訳聖書は「“Standard” versions that aim to preserve familiar wording of King James Version」「Designed for smooth reading in modern English」「Aiming for elegant literary style」という三つのタイプのクラスターに分類できるとしている。高橋 (2017) は、Covington et al. (2015) の考察を発展させ、17種類の英訳聖書のマルコによる福音書、ヨハネによる福音書を考察している。さらに高橋 (2018) は、クラスター分析の変数として句読点の出現率を加え、Covington et al. (2015)、高橋 (2017) の結論の精度を高めている。本稿は、一部目視によるデータベースの作成をおこなっている点、ならびにhin+gという語彙レベルの要素の出現率を用いて聖書を分類する点など先行研究とはいくつかの点が異なるが、特定の変数、特徴にもとづき複数の聖書を分類するという基本的な考え方は同じであり、研究の大枠を同じくするものである。

2. データ収集の対象と方法

本稿の現代語訳聖書のデータは、渡辺 (2022a) 同様、オンライン聖書のウェブサイトであ

2) ZBでは地域的な相関関係もある可能性が考えられる。

3) これらの先行研究は三宅真紀先生からご教示いただいたものである。記して感謝の意を表すものである。

るERF Bibelserver⁴⁾から収集した。対象とした現代語訳聖書は表1に挙げる10種類の聖書である。さらに1545年版ルター聖書からもデータを収集し表1に加えた⁵⁾。表の現代語訳聖書の「聖書名」はERFのもの、「略称」はERFのものを一部改変したもの、「底本出版年」はERFが記載するものである。「翻訳タイプ」は独訳聖書に関しDeutsche Bibelgesellschaft⁶⁾が記述する説明の抜粋である。

表1 聖書一覧

聖書名	略称	底本出版年	翻訳タイプ
Lutherbibel 1545	L1545	1545	
Lutherbibel 2017	L2017	2017	Philologische Übersetzung mit starkem <u>kommunikativem</u> Einschlag. Einerseits relativ wörtlich, oft sogar Wort für Wort; andererseits freie Wiedergabe des Sinnes in plastischem Deutsch
Zürcher Bibel	ZB	2007	Philologisch mit sicherem Stilgefühl.
Menge Bibel	MG	1939	Philologische Übersetzung, die sich um deutliche und verständliche Wiedergabe bemüht und dadurch <u>kommunikative</u> Elemente einschließt.
Elberfelder Bibel	ELB	2006	Philologische Übersetzung, die genaue und wortgetreue Wiedergabe anstrebt
Schlachter 2000	SLT	2000	Philologisch, auf genaue Wiedergabe bedacht.
Einheitsübersetzung 2016	EU	2016	Philologische Übersetzung mit <u>kommunikativen</u> Einschlägen, von Buch zu Buch in unterschiedlichem Ausmaß.
<i>Neue evangelistische Übersetzung</i>	NeU	2023 ⁷⁾	<i>Leicht verständliche »Übertragung der Bibel ins heutige Deutsch« (Vorwort) mit kommunikativen Elementen.</i>
<i>Neues Leben. Die Bibel</i>	NLB	2017	<i>Kommunikativ</i>
<i>Hoffnung für alle</i>	HFA	2015	<i>Freie kommunikative Wiedergabe</i>
<i>Gute Nachricht Bibel 2018</i>	GNB	2018	<i>Konsequent kommunikative Übersetzung.</i>

表中の「翻訳タイプ」は聖書分類に関する重要な項目であり、説明に見られるphilologisch, kommunikativをキーワードにすると、対象とする聖書は大きく二つのタイプに分類される。すなわち、「聖書名」の正体の7種類の聖書はphilologisch（L1545はphilologischとする）であり、イタリック体の4種類の聖書はkommunikativである⁸⁾。以下では便宜的に前者を「直訳型」、後

4) <https://www.bibleserver.com/>

5) 1545年版ルター聖書はERFではないため、ローマン体の文字を使用しているDie gantze Heilige Schrift I/II. Hrsg. von H. Volz. 1972. を用いた。

6) <https://www.die-bibel.de/bibeln/wissen-zur-bibel/wissen-bibeluebersetzung/deutsche-bibeluebersetzungen-im-vergleich/>

7) NeUはウェブ上でも改訂がおこなわれているが、本稿では2023年6月版を使用した。

8) Deutsche Bibelgesellschaftの記述によると、philologischな聖書であってもL2017, MG, EUはkommunikativな性質を持つ。「翻訳タイプ」の記述中の下線を付した部分である。また、HFAは自由度が高いkommunikativとしている。

者を「意訳型」とする⁹⁾。

以上、本稿で考察対象とする聖書の説明であるが、データを収集する聖書の書は、旧約は創世記と出エジプト記、新約はマルコによる福音書とマタイによる福音書に限定する¹⁰⁾。以下では「旧約」「新約」とする。

データの収集の仕方は渡辺（2022a）と同じである。すなわち、ERF上でgeh/ging/gegangen（部分一致を含む）をキーワードに検索し、Excel365を用いて基本データベースを作成した。続けて、基本データベースからgehabtのようにgとは無関係の語彙を除いた上でgの例を調査し、hin+gの例を抽出、マークした。データベースでは分離動詞のgは対象とし、非分離動詞のgは対象としていない。また、名詞化不定詞、現在分詞も対象としている。なお、渡辺（2022a）では一部の分離動詞、熟語等を対象から除外したが、本稿ではこれらを除外せず、形式的に対象を抽出している。

3. hin+gの出現率と直訳型/意訳型の分類の相関関係

本章ではまず基本データとなるhin+gの出現数を挙げる。続けてg総数に対するhin+g数の%を計算し、hin+gの出現率は直訳型/意訳型の分類と相関関係にあることを見る。

以下の表2は旧約、新約におけるg総数、hin+gの出現数である¹¹⁾。対立軸は、直訳型対意訳型、旧約対新約、単一hin対P複合hinの三つである。表の列の上のL1545からEUまでが直訳型、その下NeUからGNBまでが意訳型である。意訳型はイタリック体にしてある。「单一hin」はhinが他の要素と結合せず単独で現れている場合であり、「P複合hin」は例えばhineingehen、hinausgehenのようにhinに前置詞¹²⁾が後接する場合である。以下それぞれ「单一hin」「P複合hin」とする。また、「单一」「P複合」という語句が前接しない「hin」は、单一hinとP複合hinを合わせたものである。「hin+g」は单一hin+gとP複合hin+gを合わせたものである¹³⁾。

表2 旧約、新約におけるhin+gの出現数

	旧約			新約		
	g総数	单一hin	P複合hin	g総数	单一hin	P複合hin
L1545	277	48	37	312	84	45

9) 本稿では、philologisch/kommunikativ、直訳/意訳という概念自体の詳しい考察はせず、Deutsche Bibelgesellschaftの記述にもとづく分類を作業仮説として採用し、その分類がhin+gの出現率と相関するかをみるに留める。

10) 旧約聖書と新約聖書でgの出現数が大きく異なるようにしている。

11) 数値は、旧約は創世記と出エジプト記、新約はマタイによる福音書とマルコによる福音書の出現数を合計したものである。意訳型では特に单一hinの実数が少ないと留意が必要である。

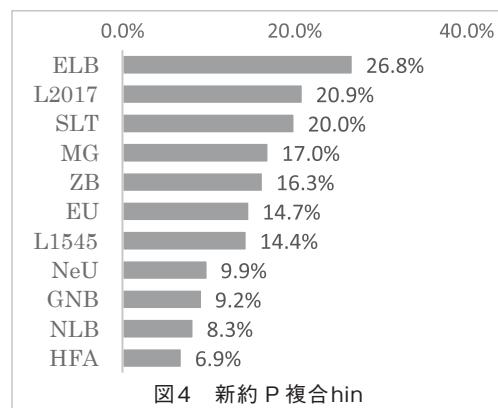
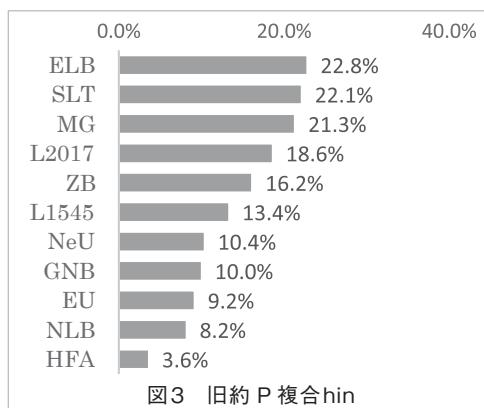
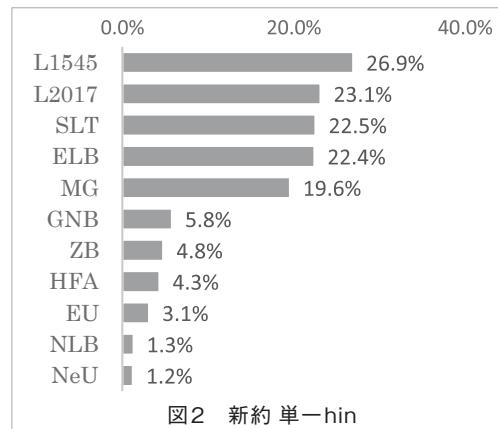
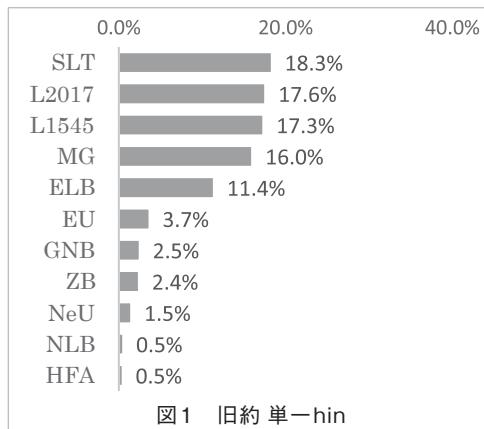
12) hinein、hinausのein、ausは前置詞ではないが、便宜上「前置詞」という名称を用いる。

13) 本稿ではhinにダイクシス副詞が前接するdorthin、dahinならびにwohinは出現数が少ないため対象とはしない。また、hin und her+gehenも除外している。

L2017	279	49	52	320	74	67
ZB	291	7	47	294	14	48
MENG	225	36	48	271	53	46
ELB	298	34	68	299	67	80
SLT	289	53	64	275	62	55
EU	272	10	25	258	8	38
NeU	202	3	21	243	3	24
NLB	195	1	16	230	3	19
HFA	220	1	8	232	10	16
GNB	239	6	24	260	15	24

3.1. 基本的相関関係A

以下の図1～4は、上の表2にもとづきg総数に対する单一hin, P複合hinの出現率を計算したものである。例えば、図1（旧約、単一hin）のSLTの18.3%は、単一hinの数53をg総数289で割った%である。



図からは、基本的に直訳型は出現率が高く、意訳型は低いことが読み取れる。これはhin+gの出現率と直訳型/意訳型の分類には相関関係があることを意味し、以下に記述する基本的相関関係Aとして規定する。

基本的相関関係A：

旧約、新約、単一hin、P複合hinを問わず、gに対するhin+gの出現率は基本的に直訳型のほうが意訳型よりも高い。

すなわち、直訳型を基準に記述すると、ZB、EUを除くL1545、L2017、MG、ELB、SLTは意訳型よりも一貫してhin+gの出現率が高いということである。表からはさらに、単一hinでは出現率が高い聖書と低い聖書の境界が明らかであるが、P複合hinでははっきりした境界がなく、漸次的に低くなることも読み取れる。

続けて聖書を個別に見ると、次の特徴が挙げられる。

- 1) 直訳型のZBは、旧約、新約とともに単一hinの出現率が一部の意訳型よりも低い。EUは、旧約P複合hin、新約単一hinの出現率が一部の意訳型よりも低い。ZB、EUは直訳型の中では意訳型に近いといえよう。
- 2) 直訳型のL1545は旧約、新約ともに単一hinの出現率が高く、P複合hinの出現率が低い。逆に同じ直訳型であってもELBは旧約、新約ともに単一hinの出現率が低く、P複合hinの出現率が高い。
- 3) 意訳型では、GNBはすべての表で出現率が一部の直訳型よりも高い。NeUは新約P複合hin以外の出現率が比較的高い。GNB、NeUは意訳型の中では直訳型に近いといえよう。逆に、HFAは新約単一hin以外の出現率はもっとも低い。NLBも出現率が全体的に低い。HFA、NLBは直訳型とは対極にあるといえよう。

続けて表2のデータにもとづきクラスター分析¹⁴⁾をおこない、結果を直訳型/意訳型の分類と比較する。用いるデータは表2のデータをg一件に対する相対頻度に変換した表3である。

表3 g一件に対するhin+gの相対頻度

聖書	旧約単一hin	旧約P複合hin	新約単一hin	新約P複合hin
L1545	0.1733	0.1336	0.2710	0.1452
L2017	0.1756	0.1864	0.2313	0.2094
ZB	0.0241	0.1615	0.0476	0.1633
MG	0.1600	0.2133	0.1956	0.1697
ELB	0.1141	0.2282	0.2241	0.2676

14) 統計ソフトはHAD 18 (<https://norimune.net/had>) を用いた。個体間非類似度計算はユークリッド距離、クラスター間非類似度計算はウォード法である。変数は旧約単一hin、旧約P複合hin、新約単一hin、新約P複合hinの四つに設定した。

SLT	0.1834	0.2215	0.2255	0.2000
EU	0.0368	0.0919	0.0310	0.1473
<i>NeU</i>	0.0149	0.1040	0.0123	0.0988
<i>NLB</i>	0.0051	0.0821	0.0130	0.0826
<i>HFA</i>	0.0045	0.0364	0.0431	0.0690
<i>GNB</i>	0.0251	0.1004	0.0577	0.0923

このデータにもとづきクラスター分析をおこなうと、以下の図5に示すデンドログラムが得られる。そして、クラスター数を2とすると以下のクラスター1と2に分割され、ZB, EUは意訳型の聖書のクラスターに含まれることがわかる¹⁵⁾。

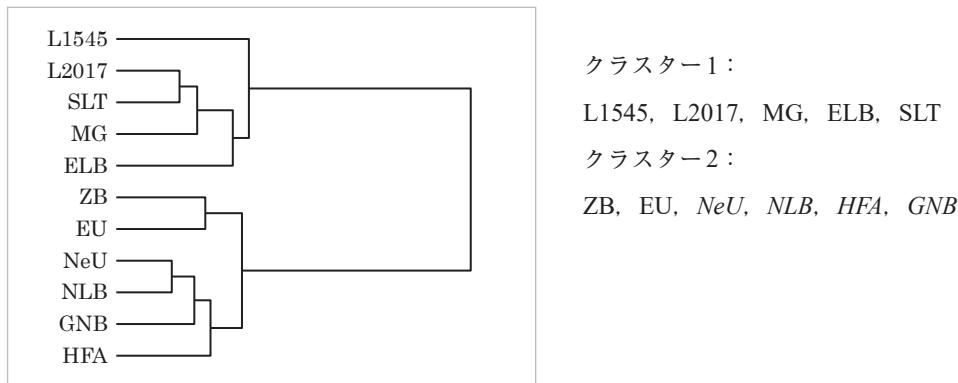


図5 hin+g現率にもとづく聖書分類のデンドログラム

上のDeutsche Bibelgesellschaftの記述にもとづく分類ではZB, EUは直訳型に分類されたが、図1～4にもとづくと、ZB, EUの出現率は総じて意訳型に接近していた。また、クラスター分析ではZB, EUは意訳型のクラスターに含まれる。いずれにせよZB, EUは、定義上本稿では直訳型であるが、hin+gの出現率に関しては意訳型に近いといえよう。

以上、本節ではhin+gの出現率と直訳型/意訳型の分類に見られる基本的相関関係Aを規定し、hin+gの出現率は基本的には直訳型/意訳型の分類の形式的指標として機能することを見た。

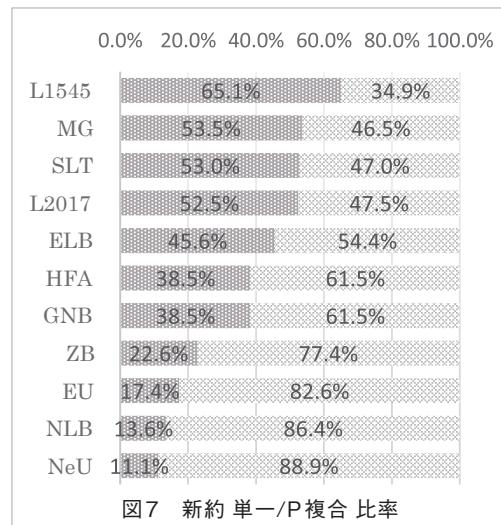
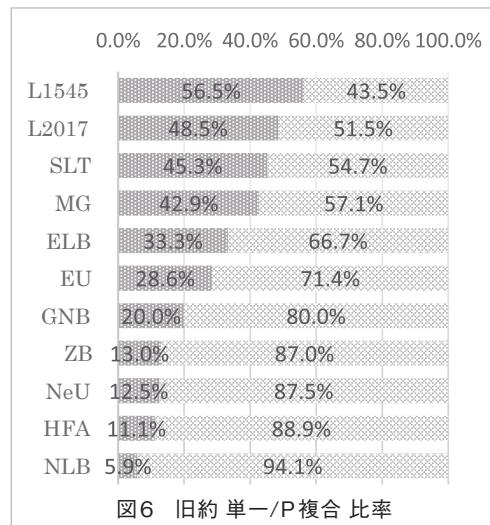
3.2. 基本的相関関係B

前節では单一hinの図1, 2とP複合hinの図3, 4を比較し、全体的にL1545は单一hinの出現率が高く、ELBは逆にP複合hinの出現率が高いことを見た。これは、L1545は单一hinの比率が高く、ELBはP複合hinの比率が高いことを意味するが、それでは、他の聖書はどのような比率になるだろうか。本節では、各聖書の单一hin対P複合hinの比率を計算し、基本的相関関係

15) クラスター分析は距離計算方法の違いにより異なる結果になる可能性があり、図5の結果は絶対的なものではない。

Bを規定する。

以下の図6, 7は、表1にもとづき hin+g を 100%にした場合の单一hin, P複合hinそれぞれの比率である。例えば、図6のL1545で説明すると、濃いほうの網掛けの 56.5%はL1545の单一hinの数48を单一hin+P複合hinの数85で割ったもの ($=48/(48+37)$) の%である。薄いほうの網掛けの43.5%はP複合hinの数37を单一hin+P複合hinの数85で割ったもの ($=35/(47+35)$) の%である。



この図からは、以下に挙げる基本的特徴Bを規定することができる。

基本的相関関係B：

旧約、新約を問わず、hin+gに対する单一hinの比率は基本的に直訳型のほうが高い。

逆に言えば、P複合hinの比率は意訳型のほうが高いことになるが、この相関関係においても直訳型のZB、EUは例外になっている。すなわち、ZBは旧約では单一hinの出現率が意訳型のGNBよりも低く、新約では意訳型のHFA、GNBよりも低い。また、EUは新約ではP複合hinの出現率が意訳型のHFA、GNBよりも低い。基本的特徴Bに関しても、ZB、EUは意訳型に近いことになる。意訳型のGNBから見れば、GNBは基本的相関関係Bに関しても直訳型に近いことになる。さらに、单一hinの出現率がもっとも高い聖書は旧約、新約ともにL1545であることは特徴的である。この要因については以下で考察する。

以上、3.1ではgに対するhin+gの出現率は直訳型で高いという基本的相関関係Aを、3.2ではhin+gに対する单一hin+gの出現率は直訳型で高いという基本的相関関係Bを規定した。それでは原文が現代ドイツ語の資料のhin+gの出現率は直訳型に近いのであろうか、あるいは意訳型に近いのであろうか。次節ではこの問題を考察する。

3.3. 原文が現代ドイツ語の資料におけるhin+gの出現率

本節では、原文が現代ドイツ語の資料におけるhin+gの出現率をDeutsches Referenzkorpus (DeReKo) を用い調査し、上の結果と比較対照する。用いるコーパスは、本稿で対象としている聖書の書同様、物語的性質が強い「div-pub - Belletristik des 20. und 21. Jahrhunderts: Diverse Schriftsteller (öffentlich)」(以下、DIV) である。また、ここでは、おおよその傾向をみることが目的なので、独訳聖書のデータとしては旧約と新約をまとめたものを用いる。また、P複合hinの例は書により多少があるが、ほとんどはhinein, hinausであるため、ここではhinein, hinausのみを対象としている¹⁶⁾。調査結果は、基本的相関関係Aに関しては表4、表5、基本的相関関係Bに関しては表6のとおりである。

表4 DIVにおける单一hin率

	g総数	单一hin数	单一hin率
L1545	589	132	22.4%
L2017	599	123	20.5%
SLT	564	115	20.4%
MG	496	89	17.9%
ELB	597	101	16.9%
GNB	499	21	4.2%
ZB	585	21	3.6%
EU	530	18	3.4%
HFA	452	11	2.4%
NeU	445	6	1.3%
NLB	425	4	0.9%
DIV	23668	174	0.7%

表5 DIVにおけるhinein+hinaus率

	g総数	hinein+hinaus数	hinein+hinaus率
ELB	597	135	22.6%
SLT	564	100	17.7%
L2017	599	104	17.4%
MG	496	83	16.7%
ZB	585	91	15.6%
L1545	589	70	11.9%
EU	530	51	9.6%
NeU	445	42	9.4%
GNB	499	38	7.6%
NLB	425	27	6.4%
HFA	452	20	4.4%
DIV	23668	516	2.2%

表6 DIVにおける单一hin対hinein+hinausの比率

	单一hin率	hinein+hinaus率		单一hin率	hinein+hinaus率
L1545	65.3%	34.7%	HFA	35.5%	64.5%
L2017	54.2%	45.8%	EU	26.1%	73.9%
SLT	53.5%	46.5%	DIV	25.2%	74.8%
MG	51.7%	48.3%	ZB	18.8%	81.3%
ELB	42.8%	57.2%	NLB	12.9%	87.1%
GNB	35.6%	64.4%	NeU	12.5%	87.5%

16) 検索式は、gは「&gehen」、单一hinは「&hingehen oder (&gehen /+s0 hin)」、hinein+gは「&hineingehen oder (&gehen /+s0 hinein)」、hinaus+gは「&hinausgehen oder (&gehen /+s0 hinaus)」とした。なお、gの検索式ではweggeht, weggegangenのように分離動詞の前つづりが基礎動詞と分離していない場合は含まれない。これが含まれるとg総数は23668よりも多くなり、表4、表5のDIVの单一hin率、hinein+hinaus率はさらに低くなる。また、gからはhin und her+gの例は除外してある

表4、表5からは、DIVのgに対するhin+gの出現率はすべての直訳型、意訳型よりも低く、表6からは、DIVのhin+gに対する单一hinの比率は意訳型の中間であることがわかる。いずれにせよDIVのhin+gの出現率、比率は意訳型と同様であることから、hin+gの出現率、比率は意訳型で有標的に低いのではなく、直訳型で有標的に高いことがわかる。それでは、なぜ直訳型のhin+gの出現率、比率は有標的に高いのであろうか。次章ではこの問題を考察する。

4. 直訳型のhin+gの出現率、比率が有標的に高い要因

直訳型のhin+gの出現率、比率が有標的に高い要因としては訳者の個人文体、原語の影響等様々なものが考えられる。本稿では包括的な要因の考察をおこなう余裕はないため、以下ではいくつかの要因に絞って見ていく。

4.1. 直訳型のhin+gの出現率が高い要因（基本的相関関係A関連）

本節では、単一hin+gとP複合hin+gの出現率が高い要因をそれぞれ一つずつ見る。まず、単一hin+gである。

橋本（1998）は欽定英訳聖書のヘブライ語法について以下のように述べている。

「これらのヘブライ語の動詞は命令文の前に置かれると動詞本来の意味は空となり、間投詞の機能を持つようになる。これらはしばしば命令文の前に置かれる。間投詞に機能変化したにも関わらず、欽定訳聖書では、多くの場合、これらを意味上対応する英語の動詞や副詞に置き換えている。Go (to), come, arise, away, vpで始まる命令文が欽定訳聖書に多く起こっている原因是ここにある。」¹⁷⁾(p.175)

引用の冒頭の「これらのヘブライ語の動詞」の一つはgo, comeに対応する hälək であるが、本稿の問題意識からは、英訳欽定聖書の旧約ではgoの命令文が多いという指摘が重要である。

表7は、この指摘を参考にカウントした、L2017（ここではL2017のみに对象を絞る）の旧約のgと単一hin+gの命令形の数である。表からは、g全体と比較して単一hin+gは命令形で用いられる傾向が強いことがわかる。直訳型のL2017の旧約において単一hinの出現率が高い一因は、訳者はgを命令形で用いる場合には単一hinを付加する傾向があるからということになる。

17) 橋本は hälək, go, come の命令形の間投詞的用法を問題にしているが、gehen, kommen も間投詞用法を持つ。この点に関しては鈴木（2021）、（2007）を参照されたい。なお、鈴木（2007: 64）は、単一hin+gが命令形で用いられた。Th. Mann, Buddenbrooksからの例「Gehe hin und verjöke dein Leben, wie du es bisher getan!」を挙げ、「undで結ばれた2文でもって命令形を作り、前半の命令文があまり意味のないものがある。したがってこの場合は、別の機能ではなく、命令表現の希薄化である。」と述べている。この構文は、命令形が後続する点で、橋本（1998）が指摘する構文と同じである。また、Donhauser（1982 225f.）は、命令表現の希薄化が見られるgehenであってもダイクシスの制約が残っている例を挙げ、さらに「Geh! Komm her!」という例も挙げている。(hin+)gehenの命令表現の希薄化、間投詞的用法と移動、ダイクシスの関連は興味深い問題であり、さらなる考察は今後の課題としたい。

表7 L2017旧約におけるg（の命令形）と单一hin+g（の命令形）の数

g数（内命令形数）	g命令形率	单一hin+g数（内命令形数）	单一hin+g命令形率
279 (46)	16.5%	49 (24)	49.0%

以上は旧約の場合だが、新約の場合も旧約同様で調査し表にすると、以下の表8になる。

表8 L2017新約におけるg（の命令形）と单一hin+g（の命令形）の数

g数（内命令形数）	g命令形率	单一hin+g数（内命令形数）	单一hin+g命令形率
320 (56)	17.5%	74 (31)	41.9%

新約の命令形率は旧約とほぼ同じであり、旧約同様新約の单一hinの出現率が高い一因も、訳者はgが命令形で用いられる場合には单一hinを付加する傾向があるからということになる¹⁸⁾。

続けてP複合hinである。これに関しては、直訳型のP複合hinは空間関係が近似する特定の原語との相関関係が強いという仮説を立て、L2017のhinein/hinaus+gの原語をBible Hubのインターリニア聖書¹⁹⁾で通り確認した。結果は表9のとおりである。

表9 L2017におけるhinein/hinausと対応する原語の出現数と英訳

書	P複合hinタイプ（出現数）	原語（出現数）	Strong's Concordance
Mo1+2	hinein+g (22)	bo (22)	to come in, come, go in, go
Mo1+2	hinaus+g (21)	yatsa (21)	to go or come out
Mt+Mk	hinein+g (27)	eiserchomai (22)	to go in (to), enter
Mt+Mk	hinaus+g (34)	exerchomai (26)	to go or come out of

表を見ると旧約ではhinein/hinaus+gの原語はすべてbo/yatsaであり、新約でもhinein/hinaus+gの原語はほぼeiserchomai/exerchomaiに限定される。また、当該の原語は、英訳を見ると、すべてin/outという空間関係が語義の中に含まれているものである。さらに、聖書ギリシャ語のeiserchomai, exerchomaiはeis, exeという接頭辞が付加されている。以上のことは、L2017におけるhinein/hinaus+gの出現率が高くなる一因は、空間関係が近似する特定の原語との相関関係の強さにあるという仮説が妥当であることを示唆するものといえよう。L2017の訳者は形式的に訳語を選択する傾向があることになる。ただし、考察はこれだけでは不十分である。すなわち、精密な考察のためには、例えば、旧約のboはL2017ではどのような語彙で訳されているのかという逆方向の調査が必要になる。さらに、意訳型の場合も同様の観点からデータを取り、

18) 単一hin+gの命令形の多用は旧約だけではなく新約においてもみられるものである。これが聖書ギリシャ語の原文とどのような関係にあるのか興味深い問題であり、さらなる考察は今後の課題したい。

19) <http://biblehub.com/> 表9の原語のラテン文字表記、Strong's Concordanceの訳語はBible Hubによる。

直訳型と比較検討する必要もあるう。

4.2. 直訳型のL1545の単一hin+gの比率が高い要因（基本的相関関係B関連）

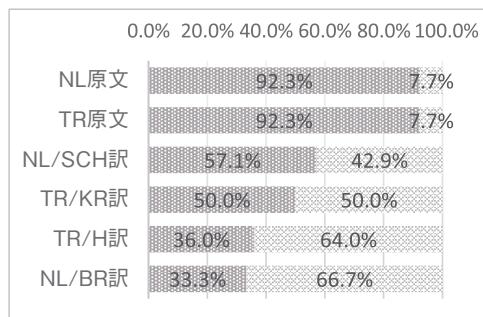
3.2では、図6、図7にもとづき単一hinの比率がもっとも高いのは、旧約、新約とともに直訳型のL1545であることを見たが、本節ではその一因を渡辺（2022b, 2023）の考察との関連で考察する。

渡辺（2022b, 2023）は、「ニーベルンゲンの歌」「トリスタン」の原文と現代語訳を比較し、現代語訳ではP複合hinの出現率が高く、現代語ではP複合hinが特に発達していると述べている。渡辺（2022b, 2023）のデータを本稿の問題意識に合わせた形に加工し、単一hin率が高い順に並べると以下の表10、図8になる。

表10 NL/TRにおけるhin+gの出現数

	単一hin	P複合hin
NL原文	24	2
TR原文	24	2
NL/SCH訳	8	6
TR/KR訳	11	11
TR/H訳	9	16
NL/BR訳	4	8

図8 NL/TRの単一hin/P複合hin比率



例えば、図8の「NL原文」で説明すると、濃いほうの網掛けの92.3%はNL原文の単一hinの数24を単一hin+P複合hinの数26で割ったもの($=24/(24+2)$)の%である。薄いほうの網掛けの7.7%は、P複合hinの数2を単一hin+P複合hinの数26($=2/(24+2)$)の%である。NL/TRとともに原文のほうが現代語訳よりも単一hinの比率が高いことがわかる。

ここで図8と図6、7を対照させると、どの図でも歴史的に古い資料で単一hinの比率が高いことがわかる。L1545のほうがL2017も含めすべての現代語訳聖書より単一hinの比率が高い一因は、L1545が出版された16世紀のドイツ語は歴史的に中高語と現代語との間に位置し、P複合hinの発達が現代語ほどには進んでいないからであると考えられよう。

続けて、もう一つL1545において単一hinの比率が高くなる要因を見ておこう。渡辺（2022b）は、NL/TRの原文のin+g, ûz+gなどhinを伴わない例が現代語訳ではhinein+g, hinaus+gのようにhinを伴って訳される場合があることに言及している²⁰⁾。ここでは、ein/aus, hinaus/hinausに限定しこの観点から統計を取ると、結果は表11、図9のようになる。図9のL1545旧約で説

20) Harnisch (1984), Hinderling, R. (1984), Latzel (1979) も参照されたい。

明すると、濃いほうの網掛けの 52.2% は、(ein+aus)+(hinein+hinaus) に対する ein+aus の出現率 ($= (35/(35+32)) \times 100$)、薄いほうの網掛けの 47.8% は hinein+hinaus の出現率 ($= (32/(35+32)) \times 100$) である。

表11 Luther における(hin) ein+ (hin) aus 数

	ein+aus	hinein+hinaus
L1545 旧約	35	32
L1545 新約	39	38
L2017 旧約	20	43
L2017 新約	15	61

図9 ein+aus 対 hinein+hinaus の比率

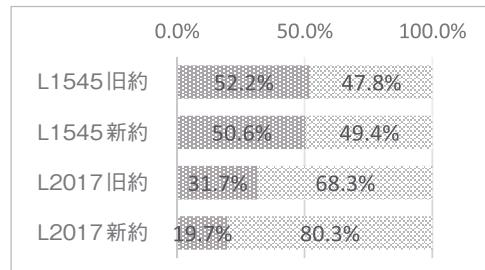


表11、図9からは、旧約、新約とともにL2017よりもL1545のほうがein+ausの比率が高いことがわかる。L1545で单一hinの比率が高くなるのは、現代語ではhinが付加されP複合hinになる場合であっても、L1545のドイツ語ではein, aus等前置詞のみで用いられるものがあることも一因になっているということである。

5. 聖書間における(hin+)gの一一致率と直訳型/意訳型の分類

第二章では、hin+gの出現率と直訳型/意訳型の分類の基本的相関関係A, Bを規定し、hin+gの出現率は直訳型/意訳型の分類の形式的指標として機能することを見た。そこでは出現率の計算はそれぞれの聖書ごとに独立におこなったが、本章では観点を変え、(hin+)gの「一一致率」を計算した結果を提示する²¹⁾。「一一致率」とは、以下で具体例にもとづき説明するが、ある聖書の(hin+)gが他の聖書の同一箇所でも(hin+)gになっている例の数を、(hin+)gの総数で割った%である。結論は、(hin+)gの一一致率にも直訳型/意訳型の分類との相関関係が見られるということである。それでは最初に一致率の計算の基礎となるデータを挙げよう。

5.1. 基礎データ

表12（旧約）、表13（新約）は、ある聖書のgが他の聖書の同じ箇所でもgになっている例の数である。表14（旧約）、表15（新約）はhin+gの場合である。例えば、表12の「L1545」で説明すると、太字の277はL1545のgの出現数である。その右の239はL1545とL2017の同一箇所でgが用いられている例の数である。L1545の277例のうち、239例はL2017の同一箇所でgが

21) 本章ではhin+gの一一致率と並んでgの一一致率も計算し比較対照する。hin+gがカッコに入っているのはこのためである。

用いられているということである（L2017から記述すれば、L2017の279例のうち、239例はL1545の同一箇所でgが用いられているということになる）。以下、同様である。「一致」は、gでは単一動詞のgか分離動詞のgかを問わない。例えば、ある聖書の単一動詞のgが、別の聖書の同じ箇所では分離動詞のhineingehen、あるいはweggehenなどが用いられている場合でも、gの使用が「一致」しているとみなす。hin+gでは、単一hinかP複合hinかを問わない。例えば、ある聖書の単一hin+gが、別の聖書の同じ箇所ではhinein+gなどのP複合hin+gが用いられている場合でも、hin+gの使用が「一致」しているとみなす。データ中の数値の斜体と正体の区別については以下の一致率の表で説明する。

表12 旧約g一致数

表13 新約g一致数

表14 旧約hin+g一致数

	L1545	L2017	ZB	MG	ELB	SLT	EU	NeU	NLB	HFA	GNB
L1545	85	81	24	43	59	67	18	7	6	2	8
L2017		101	38	53	73	79	24	16	10	4	16
ZB			54	32	41	37	25	15	10	3	15
MG				84	62	53	22	14	8	4	13
ELB					102	69	22	18	10	3	17
SLT						117	26	16	9	4	16
EU							35	14	6	4	14
NeU								24	5	3	17
NLB									17	2	7
HFA										9	5
GNB											30

表15 新約hin+g一致数

	L1545	L2017	ZB	MG	ELB	SLT	EU	NeU	NLB	HFA	GNB
L1545	129	108	32	66	90	89	26	15	12	16	25
L2017		141	50	79	109	93	33	19	13	20	32
ZB			62	45	44	42	29	19	11	17	23
MG				99	76	73	27	18	13	20	30
ELB					147	88	37	20	13	17	29
SLT						117	28	18	13	18	29
EU							46	17	11	15	19
NeU								27	9	13	16
NLB									22	11	9
HFA										26	13
GNB											39

5.2. 一致率

以下の表16～19は前節の表にもとづき計算した (hin+)gの一一致率である。表は、一致率の高さに比例してセルを濃くしヒートマップ化してある。また、この表では、聖書間の比較を容易にするため空白部を挟んで右上と同じ一致率を左下の部分にも対称的に表示してある。太字の線は直訳型/意訳型の分割線である。左上は直訳型同士、右下は意訳型同士、右上と左下は直訳型意訳型間の一一致率を表している。

表16 旧約g一致率

	1545	2017	ZB	MG	ELB	SLT	EU	NeU	NLB	HFA	GNB
L1545		86%	61%	63%	71%	73%	51%	59%	55%	42%	49%
L2017	86%		68%	70%	76%	79%	59%	63%	60%	44%	53%
ZB	61%	68%		69%	74%	71%	72%	67%	64%	46%	62%
MG	63%	70%	69%		75%	69%	62%	57%	47%	38%	48%
ELB	71%	76%	74%	75%		76%	67%	67%	61%	48%	57%
SLT	73%	79%	71%	69%	76%		65%	67%	59%	46%	54%
EU	51%	59%	72%	62%	67%	65%		67%	63%	50%	56%
NeU	59%	63%	67%	57%	67%	67%	67%		51%	54%	71%
NLB	55%	60%	64%	47%	61%	59%	63%	51%		52%	64%
HFA	42%	44%	46%	38%	48%	46%	50%	54%	52%		54%
GNB	49%	53%	62%	45%	57%	54%	56%	71%	64%	54%	

表17 新約g一致率

	1545	2017	ZB	MG	ELB	SLT	EU	NeU	NLB	HFA	GNB
L1545		90%	71%	76%	84%	84%	72%	67%	64%	64%	65%
L2017	90%		81%	84%	88%	88%	79%	73%	69%	69%	68%
ZB	71%	81%		82%	75%	78%	82%	74%	68%	69%	72%
MG	76%	84%	82%		78%	78%	74%	66%	61%	62%	59%
ELB	84%	88%	75%	78%		85%	78%	74%	70%	69%	67%
SLT	84%	88%	78%	78%	85%		77%	71%	67%	66%	65%
EU	72%	79%	82%	74%	78%	77%		75%	68%	70%	69%
NeU	67%	73%	74%	66%	74%	71%	75%		67%	65%	74%
NLB	64%	69%	68%	61%	70%	67%	68%	67%		61%	61%
HFA	64%	69%	69%	62%	69%	66%	70%	65%	61%		69%
GNB	65%	68%	72%	59%	67%	65%	69%	74%	61%	69%	

表18 旧約hin+g一致率

	1545	2017	ZB	MG	ELB	SLT	EU	NeU	NLB	HFA	GNB
L1545		95%	44%	51%	70%	79%	51%	29%	35%	22%	27%
2017	95%		70%	64%	72%	78%	69%	67%	59%	44%	53%
ZB	44%	70%		59%	76%	69%	71%	63%	59%	33%	50%
MG	51%	64%	59%		74%	63%	63%	58%	47%	44%	43%
ELB	70%	72%	76%	74%		68%	63%	75%	59%	33%	57%
SLT	79%	78%	69%	63%	68%		74%	67%	53%	44%	53%
EU	51%	69%	71%	63%	63%	74%		58%	35%	44%	47%
NeU	29%	67%	63%	58%	75%	67%	58%		29%	33%	71%
NLB	35%	59%	59%	47%	59%	53%	35%	29%		22%	41%
HFA	11%	44%	33%	44%	33%	44%	44%	33%	22%		56%
GNB	27%	53%	50%	43%	57%	53%	47%	71%	41%	56%	

表19 新約hin+g一致率

	1545	2017	ZB	MG	ELB	SLT	EU	NeU	NLB	HFA	GNB
L1545		84%	52%	67%	70%	76%	57%	56%	55%	62%	64%
L2017	84%		81%	80%	77%	79%	72%	70%	59%	77%	82%
ZB	52%	81%		73%	71%	68%	63%	70%	50%	65%	59%
MG	67%	80%	73%		77%	74%	59%	67%	59%	77%	77%
ELB	70%	77%	71%	77%		75%	80%	74%	59%	65%	74%
SLT	76%	79%	68%	74%	75%		61%	67%	59%	69%	74%
EU	57%	72%	63%	59%	80%	61%		63%	50%	58%	49%
NeU	56%	70%	70%	67%	74%	67%	63%		41%	50%	59%
NLB	55%	59%	50%	59%	59%	59%	50%	41%		50%	41%
HFA	62%	77%	65%	77%	65%	69%	58%	50%	50%		50%
GNB	64%	82%	59%	77%	74%	74%	49%	59%	41%	50%	

一致率の計算の方法は次のとおりである。例えば、表19におけるL1545とL2017の一致率は84%だが、この一致率は基礎データの表15の縦軸L1545、横軸L2017の108を、縦軸L1545、横軸L1545の129で割った%である。ここで問題になるのは、計算の分母として表10のL1545の出現数129を用いるのか（一致率84%，表19ではこれが挙げてある）、あるいはL2017の出現数141を用いるのか（一致率は77%になる）である。原理的にはどちらを選んでもよいが、大きいほうの分母を用いると、特に出現数が著しく少ないhin+gの場合には一致率が極端に低くなる場合があり、聖書間の一致率の全体の振れ幅が極端に大きくなる場合がある。そのため、ここでは小さいほうの分母を用いることにする。基礎データの表12～15の数値の斜体はこの分母の問題と関連している。すなわち、斜体の分母は、より小さい表の左にある太字の数値を用いたことを表し、正体の分母は、より小さい表の下にある太字の数値を用いたことを表している。

5.3. 基本的相関関係C

本節では、前節で見た一致率を考察する。まず、一致率の基本的な特徴として、すべての表において左上の枠の直訳型同士の一致率が高いことが挙げられる。詳しく見ると、まず表18, 19のhin+gでは、旧約、新約とともに左上の枠の直訳型同士の一致率は高い一方で、右下の枠の意訳型同士の一致率は低いことがわかる。右上と左下の枠の直訳型意訳型間の一致率は中間的な高さである。hin+gの一致率の高さには、「意訳型間<直訳型意訳型間<直訳型間」という階層があることになる。一方、表16, 17のgでは、左上の枠の直訳型同士の一致率が高いことはhin+g同様だが、意訳型同士の一致率と直訳型意訳型間の一致率には大きな差はない。gの一致率の高さには、「意訳型同士、直訳型意訳型間<直訳型間」という階層があることになる。このようにgとhin+gでは若干の違いがあるが、いずれにせよ直訳型間の一致率が高いことには変わ

りはない。これは、hin+gの出現率と並んで(hin+)gの一致率も直訳型/意訳型の分類と相関関係があることを示すものであり、以下の基本的相関関係Cとして規定する。

基本的相関関係C：

旧約、新約、g、hin+gを問わず、直訳型同士の一致率は意訳型同士あるいは直訳型意訳型間の一一致率よりも高い

基本的相関関係Cが見られる要因の詳しい考察は今後の課題とするが、直訳型では訳語を形式的に選ぶ傾向があるが、意訳型ではコンテキストに応じ訳語を比較的柔軟に選ぶ傾向があり、そのため訳語の選択の幅が広がっているなどの要因が想定できる。

続けて、一致率から読み取れるその他の特徴を簡単に挙げておこう。

- 1) 旧約と新約を比較すると旧約のほうが一致率が低い。原語の違いが一因になっている可能性がある。
- 2) 直訳型のEUの一一致率は直訳型のなかでは意訳型に近い。この点第二章で見たEUのhin+gの出現率と平行している。
- 3) 意訳型では、GNB、NeUの一一致率は直訳型に近く、逆にNLB、HFAの一一致率は全体的に低い。この点も第二章で見た意訳型のhin+gの出現率と平行している。
- 4) すべての表でL1545とL2017の一一致率はもっとも高い。これは、L2017はL1545の改訂版であることが要因になっていると考えられる。

最後に、表12～15のデータにもとづきgとhin+gの一一致率をクラスター分析する²²⁾。結果は以下のとおりである。

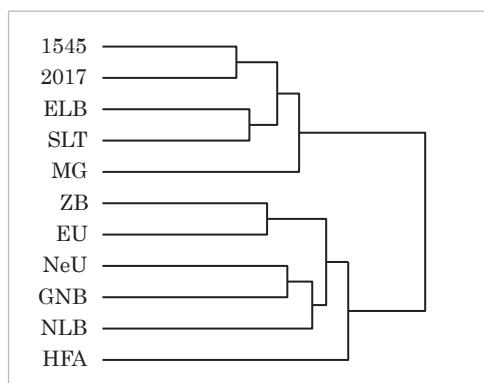


図10 旧約/新約g一致率のデンドログラム

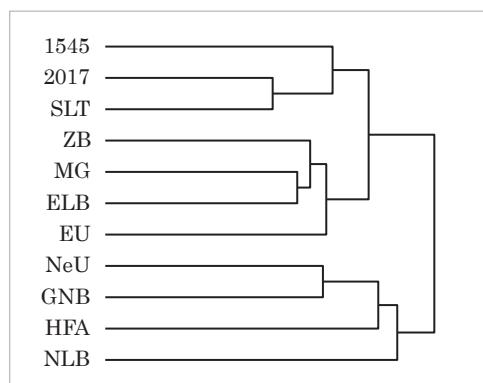


図11 旧約/新約hin+g一致率のデンドログラム

22) 用いたデータは、%表示になっている表12～15の元データである。このデータでは100%が1になっている。変数は旧約1545から新約GNBまでの計22である。また、図5のクラスター分析で言及したように、距離計算方法等の違いによりクラスター分析の結果は変わる可能性があり、この結果は絶対的なものではない。

gの図10では、ZB, EUが意訳型のクラスターの成員になっている。これは、第二章のhin+gの出現率のクラスター同様であり、ここでもZB, EUの中間的性質が覗われる。一方、hin+gの図11では、クラスター数を2とした場合のクラスターの成員にZB, EUが含まれ、直訳型/意訳型による分類と完全に一致している。また、図10, 11ではともに、NeU, GNBが一つのクラスターを形成している。これは、上で見たようにNeU, GNBはともに直訳型に近いことを反映していると考えられる。さらに、gの図10では、L1545とL2017が最初のクラスターを形成し、近い関係にあることがわかる。L2017はL1545の改訂版だからであろう。また、hin+gの図11でもL2017とL1545は近い関係にある。ただし、gとは異なり、これらは最初のクラスターを形成していない。これは、L1545とL2017とではお互いの一致率は高いが、他の聖書との一致率が異なることが要因になっていると考えられる。

以上、本節では(hin+)gの一一致率と直訳型/意訳型の分類に見られる基本的相関関係Cを規定し、(hin+)gの一一致率も基本的には直訳型/意訳型の分類の形式的指標として機能することを見た。

6. おわりに

本稿では、11種類の独訳聖書におけるhin+gを計量的な観点から考察し、その出現率は直訳型/意訳型の分類と相関関係があり、分類の形式的指標として機能することを見た。第一章では本稿の目的、結論等を概略し、第二章ではデータ収集の対象と方法について述べた。第三章は本稿の中心になるが、データにもとづき基本的相関関係A, Bを規定した。また原文が現代ドイツ語の資料と比較し、直訳型の聖書の出現率、比率が有標的に高いことを確認した。基本的相関関係A, Bの要因は詳しく考察する余裕はなかったが、第四章では、要因として、命令形の单一hinの出現率の高さ、L1545の歴史的要因、hinein/hinausと原語の相関関係の強さを挙げた。第五章では観点を変え、聖書間における(hin+)gの一一致率を計算し、出現率と並んで一致率も直訳型/意訳型の分類の形式的指標になることを見た。

本稿は、渡辺（2022a）で見出したL2017とZBにおけるhin+gの出現数の違いという小さな発見から始めた論考であるが、(hin+)gという唯一の語彙の（組み合わせの）出現率、一致率が独訳聖書の直訳型/意訳型という分類の形式的指標として機能することを見出だした点で意義があるといえよう。また、本稿は、hin+gを通して独訳聖書を見たという点で、対象が独訳聖書、手段が(hin+)gになっているが、逆に、対象がhin/her, gehen/kommen、手段が独訳聖書という研究も考えられる。発展の方向としては、例えば、hin+gだけではなく、hin/her+gehen/kommenの他の組み合わせのデータも収集し、独訳聖書を通してhin/her+gehen/kommen間の違いを考察することなどが考えられる。さらに、本稿では独訳聖書を対象としたが、上で簡単に見たようにDeReKoを用い例えば新聞等ジャンルが異なる資料のデータを収集し、ジャンルの違いによるhin/her+gehen/kommenの違いを考察することもできよう。本稿はさまざまな方向に

発展可能な研究であるが、上でしばしば言及したように様々な解明すべき疑問も残っている。さらなる考察は今後の課題としたい。

謝辞：

本論文の執筆にあたり二名の匿名の査読者から数多くの有意義なコメントをいただいた。記して感謝の意を表すものである。

参考文献：

- Covington, M. A., I. Potter, T. Snodgrass (2015): Stylometric classification of different translations of the same text into the same language. In: *Digital Scholarship Humanities*. 30 (3). pp.322-325.
- Donhauser, K. (1982): Ein Typ mit *und* koordinierter Imperative des Deutschen, In: *Sprachwissenschaft* 7/2, pp. 220-257.
- 橋本功 (1998):『聖書の英語とヘブライ語法』英潮社
- Harnisch, K.-R. (1984): „Doppelpartikelverben“ als Gegenstand der Wortbildungslehre und Richtungsadverbien als Präposition. Ein syntaktischer Versuch. In: Eichinger, L. (hrsg.) *Tendenzen verbaler Wortbildung in der deutschen Sprache*. Buske. pp.107-133.
- Hinderling, R. (1984): Konkurrenz und Opposition in der verbalen Wortbildung. In: Eichinger, L. (hrsg.) *Tendenzen verbaler Wortbildung in der deutschen Sprache*. Buske. pp.81-106.
- Latzel, S. (1979): *Der Gebrauch von „hin“ und „her“ im heutigen Deutsch*. Goethe-Institut.
- McIntyre, A. (2001): *German double particles as preverbs: Morphology and conceptual semantics*. Stauffenburg.
- 河崎靖 (2007):「ルターと初期新高ドイツ語」『ドイツ文學研究』52. pp. 85-104.
- 河崎靖 (2011):『ドイツ語で読む『聖書』—ルター、ボンヘッファー等のドイツ語に学ぶ—』現代書館
- 塩谷饒 (1983):『ルター聖書 抜粋・訳注』大学書林
- 塩谷饒 (1987):『ルター聖書のドイツ語』クロノス
- 清水裕士 (2016) :「フリーの統計分析ソフトHAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』1. pp.59-73.
- 鈴木康志 (2007) :「ドイツ語命令・要求表現のさまざまな形態について—『ブデンブローク家の人々』を例として—」『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要』44/17, pp. 49-71.
- 鈴木康志 (2021):『ドイツ語命令・要求表現』大学書林

- 高橋新 (2017): 「英語翻訳聖書間の計量的スタイル分析手法の考察」『統計数理研究所共同研究リポート386 テクストマイニングとデジタルヒューマニティーズ』 pp. 71-81.
- 高橋新 (2018): 「英語翻訳聖書間の計量的スタイル分析の考察—『マルコによる福音書』及び『ヨハネによる福音書』—」『統計数理研究所共同研究リポート405 実践計量文体学：ジャンル、トピック、キーワード』 pp. 97-113.
- 渡辺伸治 (2022a): 「現代語版ルター聖書/現代語版チューリヒ聖書におけるgehen/kommen —マタイによる福音書を対象に」『言語文化共同プロジェクト2021 時空と認知の言語学XI』(大阪大学言語文化研究科) pp. 49-58.
- 渡辺伸治 (2022b): 「gehen/kommen と hin/herにおけるダイクシス性と視点性 —現代ドイツ語と中高ドイツ語の比較対照的考察—」『ドイツ文学』166 (日本独文学会) pp. 52-70.
- 渡辺伸治 (2023): 「hin/her+gehen/kommenの考察 —ニーベルンゲンの歌とトリスタンの原文/現代語訳を資料に—」『言語文化共同プロジェクト2022 時空と認知の言語学XII』(大阪大学人文学研究科) pp. 49-58.

